

大学教育におけるフィールドワークの導入と課題
—長野市鬼無里における祭礼への参加を事例として—
Applying Fieldwork to University Education and Its Challenges
—A Case of Participation in a Festival in Kinasa, Nagano—

村尾 静二¹
MURAO Seiji¹

Abstract

In this paper, I will reflect on my own experience of introducing fieldwork into classes, summarize and clarify the process as a record, and then consider what kind of significance and challenges there are in this kind of practical class. The purpose is to What I will specifically discuss here is my experience when I participated as a class in a historical festival held in the Kinasa area of Nagano City, Nagano Prefecture in 2022. While students participated in traditional festivals in the local community and learned about the history of the local community, it was also an opportunity to experience cultural issues that the local community is currently facing. The festival has been compiled into a video work to be shared with local residents, and is also displayed and managed as archival material at a local museum for the future of the local community.

キーワード：フィールドワーク，アクティブラーニング，文化人類学，映像，アーカイブ

Keywords: fieldwork, active-learning, cultural anthropology, visual images, archive

1. はじめに

1.1 研究の目的と論文の構成

近年，大学ではアクティブラーニングによる学習法の教育的効果が多角的に検討され，実践されるなか，一つの傾向として，授業にフィールドワークを導入する試みが多くの大学において始められている。その成果に関しては，各大学のホームページや学校紹介パンフレットで公開されているが，一方で，そのような実践型の授業が具体的にどのようなプロセスを経て実現されたのかについて知る機会は少ない。なかでも，事前準備から成果の公表にいたるまでの各プロセスにおいて教員や学生はフィールドの方々とどのように関わり，そこで学生は失敗も含めて具体的にどのような経験をしたのかについて明らかにされることはまれである。また，実のところ，指導者である教員の側でもフィールドワークに対する理解は様々であり，それを実践するプロセスについての知識や経験が教員や学生のあいだで十分に共有されているとはいえないのが現状である。

このような問題意識のもと，本論文では，①授業にフィールドワークを導入した筆者自身の経験を振り返るなかで，各プロセスにおいて教員と学生が実際に経験したこと，およ

¹ 清泉女学院大学

びそこでの問題点をまとめて明示し、②そのうえでこのような実践型の授業にはどのような意義と課題があるのかについて考察することを目的とする。ここで具体的に取り上げるのは、2022年に長野県長野市鬼無里地区でおこなわれた歴史ある祭礼に授業として参加させていただいたときの経験である。地域社会の伝統的な祭礼に学生とともに参加し、地域社会の歴史を学ぶとともに、それは同時に、地域社会が現在直面している文化的な課題に触れる機会ともなった。祭礼の様子は映像作品にまとめ、地域の方々とシェアするとともに、地域社会の将来に向けて、現地の博物館でアーカイブ資料として展示・管理していただくことが決まっている¹⁾。

本論文の構成は次の通りである。最初に本論文の目的、研究の背景と意義について示したあと、次章からは筆者が授業にフィールドワークを導入した事例について具体的に述べていく。まず第2章では、事前準備のプロセスについて述べる。第3章では、実際のフィールドワーク当日の様子について述べ、第4章では、フィールドワークの成果をどのように取りまとめ、フィールドワークにご協力いただいた方々といかに成果をシェアしたのかについて述べる。そして、第5章では、この経験を振り返るなかで、大学教育にフィールドワークを導入することの意義と課題について考察する。

1.2 研究の背景

現在、大学では学生が能動的に学習するための方策が多角的に検討され、実践されている。従来のように教員が講義形式により学生に一方的に知識を教授するのではなく、学生が能動的に学習することやその学習法はアクティブラーニングと呼ばれ、この言葉はすでに大学教育において定着している。アクティブラーニングの代表例としてはグループディスカッションやグループワークがあり、どちらの場合も学生同士が意見交換や共同作業を通して、多様な視点や考え方を学び、さらには社会的な認知力や倫理観を身につけることが目標とされている。それにより期待されるのは、正解のない社会の課題に対して、どのように対処できるのかを考え抜く力の習得である（キャリア教育ラボ 2023; 文部科学省 2015）。

このようなアクティブラーニングは、文化人類学に由来するフィールドワークといくつかの共通点をもつ。一般的にフィールドワークとは、文化人類学者が調査地の社会を訪れ、一定期間（多くの場合は年単位で）そこに滞在して参与観察やインタビューすることにより、自身の研究テーマに関する情報を多角的に収集し、考察を深めていくプロセスのことをいう。文化人類学のフィールドワークには決まった方法があるわけではなく、調査者と調査対象となる人々の関係性のありかた次第で、調査はさまざまな方向に向かうことになる。ひとつの正解があるわけではなく、調査地社会と自分なりの関係を築き、そのプロセスにおいて社会的な認知力や倫理観を身につけることにより、研究テーマを深掘りしていくことになる。アクティブラーニングのヴァリエーションのひとつとして、フィールドワークが導入される背景には、このような両者の類似点を挙げることができる。

しかし、だからといって学生がすぐにこのような文化人類学のフィールドワークができるようになるわけではない。アクティブラーニングにおけるフィールドワークとは、学生が教室を出て、社会のなかの特定の場所を訪れ、社会調査をしたり、そこでしかできないことを経験することにより、実体験をともなって社会について理解を深めたり課題解決の

ための取り組みを検討したりすることをいう。実施期間としては、日帰りのものから1週間前後のものが多い。文化人類学のフィールドワークにくらべると、内容も実施期間も初歩的なものではあるが、それでも学生にとって未知の世界におもむき、そこに生きる人たちと触れ合うことは貴重な経験となり、それにより日常生活では希薄になりがちな社会の実態を直に感じ、そこにある特別な知識や課題のみならず、社会に対する感性を広く鍛えることができるのである。

1.3 本学における取り組み

このような理由から、筆者が所属する清泉女学院大学人間学部文化学科でも、カリキュラムのなかに広義な意味でのフィールドワークがさまざまなかたちで導入され、実践されている。たとえば、1年生を対象にした初年次教育の授業（授業名は基礎セミナー）では、アカデミックスキルについて学ぶと同時に、学外での活動に主体的に参加する取り組みをおこなっている。具体的には、地方自治体や大学が募るボランティア活動や地域振興に関する活動、地域のお祭りなど伝統文化に関する活動、さらには博物館・美術館が主催する講座やワークショップまで、すべての学生はこれらの活動に複数回参加する。そして、そこで経験したことやそこからみえてくる課題について考え、それは社会的な認知力や倫理観の基礎形成にもなっている。2年生に対しては、社会調査に関する基礎的な方法論を体系的に学んだうえで、地域文化を対象にして量的調査と質的調査の両面からアプローチする授業（授業名は文化学演習1・2）を2024年度から開講する予定である。3年生に対しては、社会の特定の組織と共同で文化に関する企画を立案・実行する授業（授業名は文化企画実践）が用意されており、同時に、3年生と4年生はゼミでの学びを通して、自分の研究テーマに応じたより専門的なフィールドワークを自主的におこなうことになる。このように、筆者が所属する学科では、施設見学のようなものから地域社会での諸活動への参加、さらにはより専門性の高い社会調査まで、学びや経験の習熟度に応じてさまざまなフィールドワーク教育がおこなわれている。

2. 長野市鬼無里地区の祭礼におけるフィールドワーク-事前の準備作業

2.1 フィールドワークの概要

本章では、2022年5月に、長野県長野市の鬼無里地区にある鬼無里諏訪神社において開催された御柱祭に学生とともに参加させていただき、地元の方々とともに祭礼に加わりとともに、その様子を映像記録し、地域文化の映像によるアーカイブに取り組んだ事例について紹介する。

鬼無里は、長野県上水内郡に鬼無里村としてあったが、平成の大合併により、2005年（平成17年）より長野市鬼無里地区（以下、鬼無里とする）となった。総面積は127km²であり、90%は森林である。鬼無里ではかつて麻の栽培が広くおこなわれていた。麻は高級な繊維として衣服や畳糸に使われ、麻の生産は村の経済を大いに潤していた。鬼無里村には、最盛期には6,000人に近くが住み、農作物の収穫を願い感謝する祭礼も盛大におこなわれていた。村祭りで使われる山車には豪華な装飾が施され、当時の鬼無里村の経済的豊かさをうかがい知ることができる。なお、鬼無里ふるさと資料館（長野市立博物館分館）には、4基の山車が展示・保存されており、いまでも村祭りになれば現役で使われている。また

麻の栽培過程や麻を加工する各工程，農家の生活の様子等が展示され，当時の鬼無里村の人々の生活の様子について学ぶことができる。

時代の移り変わりにより，麻の需要が減少するとともに，鬼無里村の人口も減少に向かうこととなった。鬼無里村が長野市に合併された当時，人口は 2,000 人近くにまで減少しており，現在は 1,225 人，高齢化率は 60.4%である。少子高齢化が進むなか，長野県の過疎地域に指定されている。鬼無里だけで地域の経済を支えることは困難となり，長野市内に職を得る人も増えている。それにより，農業や祭礼にもとづいて形成された鬼無里地区に固有の暦にあわせて生活することは次第に難しくなり，その結果，地域文化の継承が危ぶまれている。実際に，祭礼や年中行事を従来と同じようなかたちで実施することは年々難しくなっており，なかには担い手の確保が難しいことから，継承されなくなった文化も存在する²⁾。

このような状況をふまえ，長野市と本学とのあいだで取り結ばれている連携事業では，取り組みのひとつとして，鬼無里における地域振興と伝統文化の継承を支援するための活動を長野市と本学とが協働で推進することが位置付けられている。具体的には，筆者の専門領域である文化人類学の方法論をもちいながら，学生とともに祭礼について事前に調査し，祭礼当日には可能な範囲で参加させていただき，その様子を映像でも記録し，最終的には映像を地域の方々とシェアすることにより地域文化の映像アーカイブとしてその地域で保存・活用していただくというものである。筆者はこのような取り組みを，筆者の研究対象である東南アジアのインドネシアではこれまで何度か経験したことはあったが，長野では初めての経験であった。海外と日本では事情が異なる点もあり，慎重にこれらの作業を進めていった。次にその詳細について述べる。

2.2 フィールドワークの各プロセス

2021 年の冬，先述の連携事業に関して長野市役所の分所である鬼無里支所の方々と意見交換するなかで，活動のひとつの可能性として，翌年 5 月 5 日（木・祝）に鬼無里諏訪大社で御柱祭（正式名称は，第 24 回壬寅（みずえのとら）諏訪神社式年御柱祭）が開催予定であるが，この祭礼のなかで何か協働できないかのご提案いただいたのがこの始まりであった。御柱祭といえば，長野県諏訪市にある諏訪神社の神事として 7 年に 1 度，寅と申の年に開催される諏訪の御柱祭（正式名称は，式年造営御柱大祭）は日本三大奇祭にも数えられ，全国的にもよく知られている。一方，長野県内には諏訪神社の分社が複数あり，そのなかのいくつかの神社では，諏訪神社の御柱祭に合わせて，同じ年に御柱祭を開催している。鬼無里諏訪神社もそのひとつに数えられ，今回で 24 回ということから，はじまりは幕末から明治時代にかけての頃と推測される。

その後，鬼無里支所と筆者とで打ち合わせを繰り返すなか，フィールドワークの詳細を確定させていった。その枠組みはおおよそ次の 6 点であった。

- ①参加者…本学で筆者が担当している複数の授業から参加者を募る（大型連休中の行事となり，何人参加できるか予測できないため，特定の授業の学生を対象とはしなかった）。
- ②事前調査とインタビュー…御柱祭当日までに学生とともに鬼無里を訪れ，御柱祭の世話人やこれまでの御柱祭について詳しい方とお会いする機会を設けていただく。その際には，

フィールドワークの趣旨をご説明したうえで、鬼無里の御柱祭や地域文化について、インタビューさせていただく。それに加えて、鬼無里諏訪神社および御柱祭の主役である2本の御柱が祀られているところも訪れ、祭礼がおこなわれる場所の普段の様子を見学させていただく。

③祭礼当日の活動内容…学生は地域の方々とともに御柱を曳かしていただく。その経験を通して、世代を超えて継承される地域文化と直接ふれあい、その意味について学ぶ機会とする。また学生は交代しながら、御柱祭の様子を映像記録（ビデオ撮影）する。学生たちは鬼無里の住民の方々からすると部外者ではあるが、それゆえに学生のまなざしを通して記録された映像記録は、他者による自分たちの表象となり、鬼無里の方々が自分たちの伝統文化と向き合う姿を少し距離をとって客観的にとらえるうえで役立つものになるのではないかと思われる。また、学生たちにとっても映像記録という行為を通して撮影対象を取捨選択していくなかで、撮影対象となる文化事象に対してより意識的に向き合うことができる。

④活動成果の取りまとめ…映像記録を編集してアーカイブ作品として完成する。同時に、これからの御柱祭において中心的役割を担うことになる鬼無里の子どもたちや住民の方々と御柱祭での経験をシェアするために、御柱祭に参加することで学んだことをわかりやすくまとめた冊子を作成する。

⑤成果物を地域の方々とシェアする…映像アーカイブ作品は、鬼無里ふるさと資料館に寄贈し、地域文化の継承のために保存・活用していただく。また、鬼無里小学校で子どもたちを対象にワークショップ形式の授業をさせていただく。そこでは、アーカイブ映像作品の上映や冊子を使い、御柱祭に関するクイズもおこみながら、子どもたちが楽しく自分たちの伝統文化と向き合えるよう工夫する。そして最後に、映像アーカイブ作品のDVDと冊子をセットにして、御柱祭の当事者である鬼無里諏訪神社の氏子である37世帯すべてにお配りすることで、伝統文化の記録や継承などさまざまな用途に役立てていただく。

⑥協力者…これらの活動を限られた時間のなかで準備し、実行するために、この地域に固有の文化的な生活を保守・活性化するため日々活動されている鬼無里住民自治協議会の方々にもご協力いただけるよう交渉していただく。なお、この点に関してはその後すぐにご協力いただけることとなった。具体的には、鬼無里の住民の方々にフィールドワークの趣旨を周知していただき、御柱祭における学生の参加やビデオ撮影について住民の方々に広くご理解いただくなど、フィールドワークの極めて大事な側面においてご協力いただけることになった。

以上が、本学と鬼無里支所とのあいだでフィールドワークに関して事前に申し合わせた内容である。フィールドワークとは、調査者が実際にフィールドで何かしら活動をしているときのことだけをいうのではない。調査前の準備の段階、調査地における活動、そして調査後の活動成果の取りまとめ、さらには成果物を調査地の人々とシェアしたり公表することも含め、すべてのプロセスがフィールドワークを構成するのであり、どのプロセスも等しく重要なものである。それでは次に、実際のフィールドワークの様子について振り返り、考察する。

3. 長野市鬼無里地区の祭礼におけるフィールドワーク-祭礼に参加して

実際の活動は、上記6つの枠組みに基づいて進めることができた。本学からの参加者は教員1名（筆者）と学生5名である。ここでは、事前調査、祭礼当日、活動成果の取りまとめの観点から、フィールドワークを振り返ってみたい。

3.1 事前調査

事前調査として、鬼無里の御柱祭に詳しい方をご紹介いただけるよう鬼無里支所にご依頼したところ、前回の御柱祭の総代、今回の御柱祭の総代長と総代、鬼無里地区住民自治協議会会長といった鬼無里の歴史を熟知されている諸氏にお話をうかがえることとなった。そこで、学生5名と鬼無里支所を訪れ、応接間でお会いすることになった（写真1）。最初に、フィールドワークの趣旨をあらためてご説明したうえで、祭礼当日の式次第にもとづいて段取りを確認させていただき、その後インタビューをさせていただいた。事前に質問をリスト化して先方にお送りしており、当日はそのリストにそってご回答いただいた。質問は、鬼無里における御柱祭の歴史、諏訪神社の御柱祭との関わり、生活の変化にともなう祭礼の変化、年齢および男女にもとづく役割分担、7年ごとの祭礼をどのように伝承し、そこにはどのような課題があるのか、さらには祭礼にかかる費用まで、多岐にわたる。

その後、諸氏にご案内いただくかたちで、鬼無里諏訪大社を訪れ参拝させていただいた。神社の前には、7年前に建てられた2本の御柱（男柱と女柱）がその後の歳月を刻みながら静かにたたずんでいた。次に、新たに建てられる御柱が祀られている場所もご案内いただいた。森林から切り出されたばかりの巨木が横にして祀られ、注連縄で結界がつけられていた（写真2）。さきほど見学した神社に建っている御柱と結界のなかに明日の出番を待つ御柱とのあいだに、御柱祭は存在する。わずかな経験ではあったが、祭礼の継承に関する特別な感覚のようなものを得ることができた。御柱祭に参加させていただくうえで、事前にこのような経験をすることができたのはとても意義あることであり、それは祭礼当日に参加するだけでは得られないものである。

3.2 祭礼当日

御柱祭当日は、式次第にもとづいて進められた。2本の柱がそれぞれ鬼無里地区の端に祀られており、学生たちは二手にわかれてそちらに向かうと、しばらくして鬼無里諏訪神社の宮司による祈祷がはじめられた。その後、御柱は地面におろされ、多くの人が曳くことができるように長い縄が結えられる。そして、それぞれの御柱は各組頭のかげ声とともに、そこから鬼無里諏訪神社までの道のりを50～60人の参加者によりゆっくりと曳かれていった（写真3,4）。御柱の長さは10メートル近くあり、相当な重量があることから、すこし曳くだけできつい作業であることがわかった。参加者のなかには子どもや女性、高齢者も多く、力にまかせて一気に、というよりは、時間をかけてすこしずつ歩みを進めるように曳かれていった。道中には上り坂や曲がり道など、特別に注意を払いながらもより大きな力をだして進めねばならない難所もいくつかあり、そのような場所では木遣りによる木遣り唄がうたわれ、団結への意識が強められていた。また、疲労がつのる鬼無里諏訪神社近くになると、さらに多くの木遣りがつどい、大きな声で木遣り唄がうたわれ、御柱祭独特の雰囲気がつくられていた。

鬼無里諏訪神社に2本の柱が到着すると、御柱を新たに建てるための祭事が進められた。一部クレーンで御柱をささえながら、基本的には人力により住民総出で綱を引き、御柱を建てていく。その横では木遣りがそろって木遣り唄をうたい、人々の綱を引く動作に節をつけていく。この日の祭礼のなかで御柱が最もダイナミックに動かされたのがまさにこの瞬間であり、そこにいるもの全員の意識が御柱に注がれるなか、祭礼という非日常的な時空のなかで鬼無里諏訪神社は7年の歳月を経て再生することとなった（写真5）。その後は、獅子舞や神楽により、神社の再生を祝福し、事前にお供えしていた神饌（しんせん）を参加者でいただく直会（なおらい）がおこなわれた。学生たちは、その様子をそばで観察し、ときに住民の方々と言葉を交えながら、この祭礼は地域の人たちにとってどのような意味をもつのかを実体験をもって学ぶ機会となった。また、そのような参与観察を通して祭礼の各プロセスを映像記録することができた。

4. 長野市鬼無里地区の祭礼におけるフィールドワーク-成果の取りまとめ

4.1 活動の振り返りと成果の取りまとめ

後日、記録映像を学生と確認し、編集の方針について話し合った。テレビ番組でよくされているように、時系列を組み替え、劇的な場面（本作品であれば、御柱を建てる場面）を最初にすることで劇的な編集をすることはできる。しかし、本作品はアーカイブを前提としているために、御柱祭を見たことがないものが映像作品を通して御柱祭とはどのような祭礼なのかを知ることができることを編集において最も尊重されるべき価値観と考え、5つの点を意識して編集することにした。

- ①時系列にそって編集する。
- ②映像のなかで起こっていることを、視聴者はナレーションや説明の字幕を通して理解するのではなく、映像から直接観察できるような編集を心がける。具体的には、編集のリズムに影響を与えないときには、各ショットの時間はできるだけ長くとる。
- ③作品は祭礼当日に撮影した映像だけで構成し、それ以外の映像は使用しない。
- ④アーカイブ資料としての価値を優先するために、ショット編集と字幕を加える以外に映像は加工しない（色調補正、トリミング、写り込んだものの除去など）。
- ⑤撮影現場にない音楽やBGMは加えない。

この5点は、自然の法則により出来事の因果関係を客観的に示すことを目的とする科学映画やアーカイブ映像において最も採用される編集方針である。映像編集のソフトウェアはアドビ社のプレミアを使用した。映像アーカイブ作品の編集において最も問題になるのは作品時間である。撮影対象についてより多くの情報を残すことを目的とするのであれば、作品時間が長いほど作品の資料的価値は高まることになる。一方、視聴することを前提とするのであれば、資料的価値に配慮しながらも、視聴者の意識や視点が散漫にならないように一定の時間のなかで作品化していく必要がある。ちなみに、本作品は鬼無里ふるさと資料館に寄贈して、保存・展示していただくことになっていることから、双方で事前に話し合い、30分前後の作品を完成することとした。

映像アーカイブ作品に加え、御柱祭に参加させていただくことで直接感じ、学ぶことが

できたことについて振り返り、冊子にまとめた。編集方針として、将来の御柱祭を担うことになる鬼無里地区の小学生たちに関心をもって読んでもらえるような、わかりやすく、愛着を感じてもらえるようなものにするを目標に5つの点に留意して作成することとした。

- ①わかりやすい言葉づかい、表現に留意する。
- ②情報量が多くならないよう、ポイントをしぼり、どうしても伝えたいことを精査する。
- ③イラストやフォント、色づかいなど、誌面をシンプルにわかりやすく構成する。
- ④今回の御柱祭の記録資料としても役立つよう、写真を複数枚使用する。
- ⑤映像アーカイブ作品と相互補完的になるような内容とする。

冊子の作成には、アドビ社のイラストレーターとマイクロソフト社のパワーポイントを主に使用した。また、鬼無里の観光文化の振興において馴染みのあるキャラクターを許可を得て冊子の表紙に使わせていただくことにより、鬼無里地区の方々にとって愛着をもつていただけるデザイン構成に仕上げることができた。作業手順としては、学生たちで冊子に使われる文章の原稿と誌面構成をつくり、それを筆者が校正するというプロセスを何度か繰り返すなかで完成品へと近づけていった。

4.2 成果物を地元の人たちをシェアする

成果物を地元の人たちとシェアすることは、外部の人間（今回の場合は、祭礼に参加させていただいた本学の学生たち）が祭礼や地域の文化、人々との交流をどのように経験し、それをどのような言葉や映像で表現したのかを地域の人々が知るうえでとても大事なプロセスである。そして、最終的には、祭礼を含む地域の文化をあらためてどのようなものとして理解し、将来の地域文化の姿を描き、それにむけてどのように歩みを進めていくかはいずれも地域の人々に委ねられることになる。その意味において、成果物を地域の人々とシェアすることは、今回のフィールドワークにおいて重要な意味をもつ。しかし、その一方で、成果物をシェアするということは、自分たちが考えていることを包み隠さず公にすることでもあり、事実誤認や誤解、さらには理解の浅さがそのまま露呈してしまうことになる。また、こちらが誠意をもって考察したことであっても地域の人々に同意してもらえないことはあり得ることで、かといって地域の人々が納得できることだけを成果にまとめることは学問の本来の目的から外れることにもなりかねない。このように、成果物をシェアするプロセスにおいても現地の人々とさまざまに交渉を続ける必要があり、その都度誠意ある対応が求められる。

シェアをするための最初の機会は、鬼無里小学校の教室で小学生たちを対象にした特別授業というかたちで実施することができた(写真6)。全校生徒11名に参加していただき、教頭先生、鬼無里ふるさと資料館職員、鬼無里支所職員もそばでその様子を見学いただいた。最初に参加者に冊子を配布して、その内容にそって事前調査の様子、御柱祭当日に学生たちが経験したことや学んだことをわかりやすく説明した。そして、御柱祭当日を思い出し、学生たちの話の内容をより理解しやすくするために、映像アーカイブ作品のいくつかの場面上映した。続いて、クイズによるゲームでは御柱祭に関する基本的な問いから、

祭礼の細部にまで関心をもってもらえるように難易度の高い問いまでおりませず、楽しむことができた。そして最後に、7年後の御柱祭で自分はどのように関わりたいかを紙に書き、7年限定のタイムカプセルとして保存することとした。なお、保存場所は鬼無里ふるさと資料館にお世話になることになった。授業前には、御柱祭に対してそれほどしっかりと知識はなかったけれど、いまは次回の御柱祭で何かしらの役割を担いたいと語る子どもたちの明るい表情が印象的であった。

そして、映像アーカイブ作品（DVD）と冊子をセットにして、御柱祭の当事者である鬼無里諏訪神社の氏子の各世帯に1セットずつ配布させていただいた。配布に際しては、鬼無里支所と鬼無里地区住民自治協議会にお世話になった。映像作品と冊子に対する住民の方々の感想をアンケート等で収集させていただくことまではしなかったが、鬼無里支所の方によると、おおむねの方々はこれらの成果物を楽しく閲覧していただいているとのことである。ひとつの問題となったのは、わずかな事例ではあるが、映像アーカイブ作品のDVDがご自宅のDVDプレーヤーで再生できない事例が生じたことである。映像作品はパソコンで編集してDVDへとディスク化する。それを家庭用DVDプレーヤーで再生すると、DVDプレーヤーのメーカーや製作年によってまれに再生できないことがある。映像データをファイル化してシェアすることも検討したが、それにはパソコンとインターネット環境が必要であり、高齢の世帯では対応が難しい。そこで鬼無里支所に映像アーカイブ作品のDVDと冊子を保管していただき、自宅でDVDを鑑賞できない方は鬼無里支所でいつでも鑑賞していただけるように取り計らっていただけることとなった。

以上が、鬼無里諏訪神社御柱祭をめぐるフィールドワークの内容である。祭礼やイベントに参加してフィールドワークをおこなう場合、その日だけの活動かと思われることも多いが、実際にはそれ以前から活動は始まっており、活動がすべて終わるのもそのさらに後ということになる。

5. 大学教育にフィールドワークを導入することの課題と展望

5.1 課題

本論文で取り上げた鬼無里における祭礼への参加のほかにも、筆者はこれまで長野市で複数の機会を通して、大学の授業のなかにさまざまなかたちでフィールドワークを導入し、そこでの課題と可能性について経験的に学ぶ機会を得てきた。そこにはどのような意義や課題があるのかについて考察する。

5.1.1 地域社会を直接理解するうえで、大きな学びの機会になりうる

学生に「自分は地域社会の一員であるという実感はありますか」と訊ねると、多くの学生は、ない、と答える。実際には、生活環境の清掃、ごみの収集、義務教育、選挙、成人式などは、いずれも町内会から地方行政まで、地域社会による取り組みのなかで提供されるサービスであり、わたしたちはその恩恵に日々あずかりながらも、地域社会の一員であるという感覚をもちにくい。このような時代の感覚を背景として、学生たちは地域社会や地域文化について学んでいるのであり、教室のなかでの講義だけでは、表面的な学びにとどまることになるのではと懸念される。このような状況のなかで、フィールドワークは、地域社会や地域文化を直接経験することのできる貴重な機会となっており、それにより学

生たちは講義で学んだ知識をより深い理解につなげることが可能となる。

5.1.2 地域社会の振興への期待

フィールドワークはそれに参加する学生たちだけに利点があるわけではなく、それを受け入れる地域社会にもいくつかの点において貢献することができる。少子高齢化が進む地域社会に対して若者が関心を寄せることは、異なる世代間における知識の循環をうながすことになる。そのような循環が広がるなかで、地域社会のなかでは関心がもたれにくくなっている地域文化が掘り起こされ、新たに関心がもたれるようになることはよくあることであり、そのようななかで地域振興や伝統文化の継承につながる可能性をもつ。

5.1.3 フィールドワーク教育をする側が準備すべきこと

教育する側も、常に地域社会と関わり、信頼関係を構築することが大事である。地域社会でフィールドワークをする経験をしたなら、その成果は地域社会の人々とわちあひ、自分たちはフィールドワークを通して何に取り組んだのか、そして何を学ぶことができたのかを包み隠さず示すことは、とくに大事な点である。そうすることにより、地域社会の人たちは大学側の目的や意図をあらためて理解し、次の機会につながることにもなる。同じ地域で何度かフィールドワークをするうちに、地域社会の側から、近々ある祭礼があるのでフィールドワークに来られませんか、とお誘いをいただくことは珍しいことではない。このように、大学がフィールドワークをする目的や意図を先方の地域社会の人々に理解していただくことは、フィールドワークをより充実した学びの場にしていくうえで重要である。また、継続的にフィールドワークを実施して、そのような相互理解の関係性を維持しておくことも大事である。

5.2 展望

情報のデジタル化やインターネット空間の登場は、産業革命以来の社会の大転換といわれる。それがどのような意味をもつのか、人類がその全貌を理解することができるのはさらに先のことになるであろう。しかし、現実的な問題として、社会はさまざまな情報であふれ、情報量のスケールはとてつもない速度、規模で広がり、その実態を推測することはすでに難しくなっている。そこでは確かな情報とそれを凌駕する不確かな情報が混在して並べられ、そのいびつな情報のあり方はときに現実に影響を及ぼし、もうひとつの「現実」となることさえある。21世紀は情報の時代といわれるが、情報にはこのような不確かな側面があることを常に心得ておかなければならない。情報に対して向き合いつつも半分背を向けるような、適切な距離を自分なりに探し、身につけるだけでも、情報との関わり方は内実をともなった豊かなものへと変化していくきっかけになるのではなかろうか。

それと同時に、どのような情報であってもすぐに鵜呑みにするのではなく、自分にとって大事と思われる情報に関しては、自分なりの取り組みを通して調べてみることも大事である。そうすることによって、情報についての客観的な視点を学ぶことができ、情報を得つつも、自分なりに調べ、現実社会の理解に対するより客観性をともなった総合的な視点を得ることができるのである。そして、フィールドワークはそのプロセスに大きな役割を果たす可能性をもっている。これから情報空間はますます拡大していくであろうが、そ

れと同じく、フィールドワークのように自分自身が経験を通して情報をみずから収集したり、情報の正しさを時間をかけて確認していくことも、より重要になっていくと考えられる。大学教育にフィールドワークを導入することの課題や問題点について、今後も検討を続けたい。

注

¹ 映像アーカイブを目的とする学術映像作品の制作プロセスについては、筆者による拙稿（村尾 2015）があり、本論文における映像制作に関しても基本的にはそれに基づいて作業を進めた。

² 鬼無里支所地区の歴史や行政の基本情報に関しては、鬼無里地区住民自治協議会のホームページ（<https://fureaikinasa.jp/> 閲覧日 2023 年 12 月 12 日）および鬼無里支所に問い合わせ、情報提供していただいた。

写真



写真 1 鬼無里支所にて祭礼の前に関係者にインタビュー調査をする様子（2022 年 4 月 27 日 鬼無里支所にて筆者撮影）



写真 2 祭礼の準備が進められる様子を事前調査する（2022 年 4 月 27 日 鬼無里にて筆者撮影）



写真3 御柱祭当日の様子 (2022年5月5日 鬼無里にて筆者撮影)



写真4 地域の方々と御柱を曳く学生たち (2022年5月5日 鬼無里にて筆者撮影)



写真5 御柱(男柱と女柱)が建てられ、祭礼は最高潮を迎える (2022年5月5日 鬼無里にて筆者撮影)



写真 6 鬼無里小学校で生徒たちとフィールドワークの成果をシェアする様子（2022 年 11 月 4 日 鬼無里小学校にて鬼無里支所撮影）

参考文献

キャリア教育ラボ「アクティブラーニングとは？」.

<https://career-ed-lab.mynavi.jp/>（閲覧日 2023 年 12 月 12 日）

文部科学省（2015）「アクティブラーニングに関する議論」.

https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2015/09/24/1361110_2_5.pdf（閲覧日 2023 年 12 月 12 日）

村尾静二（2015）「学術映像の制作に向けて-文化科学・自然科学における映像制作の基本的問題」, 分藤大翼, 川瀬慈, 村尾静二編（2015）『フィールド映像術』古今書院, 28-44.

長野県鬼無里支所村教育委員会（2001）『鬼無里の年中行事』.

中牧弘允（2016）「山国・信州の心象風景」『季刊民族学』（一般財団法人千里文化財団, 協力 国立民族学博物館）第 157 号 特集 信州の山, 17-27.

佐藤郁哉（2006）『フィールドワーク増訂版』新曜社, 147-204.

住原則也（2001）「フィールドワークを通じて学ぶ方法」住原則也, 芹沢知広, 箭内匡編（2011）『異文化の学びかた・描きかた—なぜ, どのように研究するのか—』世界思想社, 113-166.